

エンジニアを目指す学生への海外インターンシップの勧め(修正版)

加藤浩徳

(東京大学大学院工学系研究科; kato@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

ヨーロッパの大学では、学生が他国の企業や大学へ短期研修に行くことが当たり前になっているようだ。現在、私の滞在しているスイス連邦工科大学の研究室(注:筆者は2005年4月から1年間スイスに滞在した)でも、チリ、インド、ドイツからそれぞれ修士の学生が3ヶ月程度、研修に来ている。

最近、日本でも海外インターンシップが普及しつつあるが、これは、とてもよい傾向だと思っている。海外研修の効用は、いろいろな国の友人ができたり、語学が身に付いたり、日本では味わえない海外生活ができたり、と様々だ。私も、大学院修士1年の夏に、イアエステ^注を通じて、オランダの河川関連の国立研究所で3ヶ月間インターンをした。でも当初は、英語がほとんどできなくて、本当に苦勞した。



例えば、研修開始前日のことである。私は、現地で面倒をみてくれる予定のメンターに初めて会う約束をするのに、事前入手していた書面をもとに、公衆電話からメンターの自宅へ電話をした(当時は、まだ携帯電話もインターネットも普及していなかった!)。メンターは、電話口から私に向かってこう問いかけた:「How tall are you?(君の背丈はどれくらいかい?)」。初めて会う人なので、待ち合わせ場所で私を見つけるのに、体つきを目安にしようと考えたのだろう。ところが、彼の問いかけは、何回耳をすませても「How old are you?(君は何歳なのか?)」としか、私には聞こえなかったのだ。受話器に向かって、「I am 22 years old!(22歳です!)」と何度も叫んでいたのを思い出すと、今でも赤面してしまう。ちなみに、待ち合わせ当日は、その場に、東洋人が私しかいなかったのも、全く問題なく落ち合うことができた。

また、研修初期には、こんなこともあった。研究プロジェクトの打ち合わせで、研究所のメンバーと一緒に、河川中の浮遊物質の動きについて議論をしていた。ところが残念ながら、当時の私には、「浮力」という単語がわからなかった。そこで、口から出まかせに、「Floating power」と言って話をしたのだが、周りの者は誰も私の言っていることを理解してくれなかった。これでは、「浮力発電」としか解釈しようがないので、議論の文脈からしても、周りの者が理解できないのは当然だ。力学で言うところの「力」が、英語で「Force」であるのは、物理で通常「F」という記号を使うところからも、想像できておか

^注 イアエステは、理工農薬系学生のための国際インターンシップを仲介している国際非政治団体である。国際的な広い視野を有するエンジニアを養成することを目的とする。(社)日本国際学生技術研修教会のホームページアドレスは、次の通り：<http://www.iaeste.or.jp/>。

しかなかったはずなのだが、当時は、そんな機転の利く余裕のある状況ではなかった。



こんな感じで、毎日あまりに会話にならないので、研究所の人たちが次第に私をバカにし始めた。こいつは、英語が全然わからないみたいだし、今年の研修生はだめだね、という感じで... ついには、ランチの時間にも孤立するようになってきた。

ところが、ある日のことである。研究所の定例ミーティングの時に、研究員の一人が、ふと模造紙とフェルトペンを出してきてくれたのだ。今思えば、あまりにもコミュニケーションのできない私を見かねて、助け船を出してくれたのだろう。案の定、私は、英語ではうまく説明できなかつたので、模造紙に力学の数式(高校で習う程度の初歩の内容だが)を書いて、言いたいことを懸命に説明してみた。すると、どうだろう。話を聞いた研究員の人たちの顔色が急に変わって、私の話を真剣に聞いてくれたのだ！そのときは、飛び上がりそうになるくらいうれしかった。誰からも相手にされずに、本当に寂しかったのである。さらには、それ以降、研究員たちの私に対する態度が一変し、私の拙い英語でもじっくり聞いてくれるようになった。数式は世界共通だ、と実感したのと同時に、我が国で受けた数学や物理の基礎学校教育にとっても感謝したことを今でもよく覚えている。とても小さな成功体験だが、このおかげでその後、海外の仕事でも少しは自信がついたのではないかと思う。



こうした経験は、単なる海外旅行ではなく、実際に何らかのプロジェクトや仕事に関わるインターンシップでないと、なかなか得られるものではない。今後、我が国のエンジニアは、どんどん世界にでて仕事をしなければならないのが確実だ。国際的に活躍できる人材の育成のためには、我が国でも海外インターンシップがもっと当たり前になるよう変わっていくべきだと思う。また、学生も早いうちにこうした経験をするのが将来にとって有益であるのは間違いない。若い学生の皆さんが、どんどん世界にチャレンジし、失敗を乗り越えて、人生の幅を広げていってくれることを切に期待している■